

## <小軸「彩暦」6種【お正月】【節分】【桃の節句】【端午の節句】【七夕】【重陽の節句】>



### 【お正月】

本来十干十二支のことを干支といい、来年は壬寅（みずのえのとら）の年となります。「壬（みずのえ）」は実の内部に新しい種子（陽気）が孕まれることをさし、また水の陽、厳冬・静寂・冬の象徴でもあります。「寅」は成長や誕生、春の象徴である木の陽を意味します。木（寅）とそれを補完する水（壬）が合わさることで、厳しい冬を超え注がれる水は力強い春の芽吹きに繋がるといえます。年神様をお招きするお正月、干支の意味を考えながらどんな一年になるかと想像を巡らせるのも楽しみの一つになるのではないのでしょうか。この小軸は「鶴虎図（じゃっこず）」という古来より描かれる意匠を用いました。虎は山の神とされ、その神に吉兆を報せる鶴（かささぎ）の図です。豊かな一年の始まりとなりますよう想いを込めて。

### 【節分】

※本来“節分”とは立春、立夏、立秋、立冬の前日をいう

今に残る節分の行事は、もともと平安時代宮中の追儺会から始まったもので、旧暦 12 月 30 日に行われた儀式が起源の行事です。旧暦の 12 月 30 日というのは「新年＝立春」の前日である大晦日にあたり、1 年に 4 回ある節分の中でも新年を迎える特別なものとして今に残り、「鬼は外 福は内」という掛け声は、「“豆（まめ）” → “魔（ま）” を “滅（め）” つする」という語呂合わせもベースにあります。その他には、神の力の宿る桃の弓で、邪気を祓うと言われる葦の矢を放ち魔を追いやるという儀式も現代に残ります。それらのことから、「福は内」のおたふくさんと魔を追いやる「桃の弓」の桃、「葦の弓」の葦を意匠としました。



### 【桃の節句】

今回の小軸に描いたものは「お伽犬（おとぎいぬ）」といい雌雄一対、顔は子供・体は犬の形をした置き物で、起源は狛犬といわれます。犬はお産が軽たくさんの子を産むことから子供の成長や子孫繁栄を願うものとして飾られてきました。そこから特に女の子の雛道具の一つにも数えられます。向かって右は松の文様の描かれた雄、左は藤が描かれた雌。松は千歳の緑、長寿と不変の象徴、そして高貴な香りを放つ藤は邪気払いの象徴です。強い松（男性）に寄りかかるなよやかな藤（女性）という昔からの考え方ではなく、松と藤、お互いがあり共生するという想いを込めています。

### 【端午の節句】

端午の節句にその時期に盛りを迎える菖蒲が使われるようになったのは、菖蒲には健康を保ち邪気を祓う力があるとされていたことだけではなく、武家社会が発展した鎌倉時代以降は、「菖蒲」の音が「尚武（武を尊ぶ）」に通じることから勝利の願掛けとして兜にその葉を挿し戦いに赴くなど、武家の行事として盛んに祝われるようになりました。

小軸の意匠で花菖蒲と共に描いた水の流れは花菖蒲の咲く湿地をイメージし、花が水に清められ恵みを受けて育つようにと想いを込めたものです。





### 【七夕】

七夕は、「乞巧奠（きこうでん）」という旧暦の7月7日に針仕事の上達しより優れた技術を授かるように織女（しょくじょ）の星に祈りを捧げるといふ古代中国の行事と、日本の「棚機津女（たなばたつめ）」の行事が合わさり、現在の形になったといわれます。日本では機織りや針仕事だけではなく、書道や芸事の上達も含まれるようになりました。

今回の小軸は「乞巧奠（きこうでん）」をもとに天の川の下、針仕事をする女性を描きました。祖先を想い、今の自分があることに感謝し、星に祈りを捧げる。この作品を見て空に心を馳せ、素敵な時間を過ごしていただけたら嬉しいです。

### 【重陽の節句】

陰陽思想の中で最高の陽数「九」が重なることから「重陽」と呼び、お祝の風習は飛鳥時代の天武天皇のころ伝わったとされます。そして平安時代には観菊の酒宴が宮中の行事になったといわれます。

菊は別名を「翁草（おきなぐさ）」、「千代見草」ともいわれ、古来より長寿をもたらすおめでたい花とされます。

この小軸の意匠は、長寿をもたらすとされる中国の故事「菊慈童（きくじどう）」の伝説を描きました。

周代の王に寵愛されていた童子が菊の花咲き乱れる仙山に追われ、そこで法華経を書いた菊の葉の露を飲み、仙人になるというお話です。この物語のように菊の香りの濃く漂う空気を感じて楽しんで頂けたらと想いを込めています。

